

劇団・銀仮面団

代表者／藤澤陽一 所在地／岡山市東区東幸西
設立／1975年 メンバー／10人

「星伝説 明日は誰も歌わない」の上演

目的

我が劇団の活動目的の一つである、「現実と未来を見つめ、より激しく生きる為のエネルギーを追求する」つまり、我々人間が一人ひとりの生をよりよく輝かせ、充実した人生を送ることが、他の生き物の生命をも愛しみ、ひいては地球全体を大切に、よりよく生きる可能性を見出す手段の一つとして演劇という表現方法を用いている。

この度の作品「星伝説 明日は誰も歌わない」は1994(平成6)年に上演された「ラビリンスから消えた13号室」の再演となる。代表の藤澤自身非常に思い入れの強い作品で、15年以上前の作品ながら、そのテーマ性は現在を生きる我々にも十分訴えかける価値があると思い、この作品を選んだ。

経過

2009(平成21)年終盤に作品決定、制作に取り掛かる。制作期間は約1年。2010(平成22)年6月までは毎週1回、7月以降は毎週2回以上の稽古にて作品完成へ。稽古場は主に「天神山文化プラザ練習室」、「岡山県生涯学習センター貸し室」「岡山県立鳥城高等学校貸し室」(二つとも三学ばる岡山内)。制作中及び本公演に関わった人員は、演者7名、裏方15名の計22名。

公演会場は「天神山文化プラザホール」(以下「天プラ」)

公演日時は2010(平成22)年10月23日13時30分～/18時30分～、24日13時30分～

上演時間1時間30分弱の作品を2日間計3回上演。観客動員数は200名弱。

成果

劇団員の世代交代、新陳代謝が激しく進む中、今作品は現劇団員の表現力が飛躍的に伸び、今まで以上に質の高い作品を提供することができたと思う。

劇団の現状は、ある者は経験があっても年齢が若く、またある者は年齢が高くて経験が浅かったりと、全体としてはまだまだ未熟な面が多いが、各々に成長の跡が見られ、今後を担う人材が育ちつつあることは、我が劇団にとって非常に明るい材料で成果だと思う。個人の成長が演劇人として、人として、生き物としての成長につながって行けば、劇団としてのさらなる飛躍が期待できる。

今後の課題と問題点

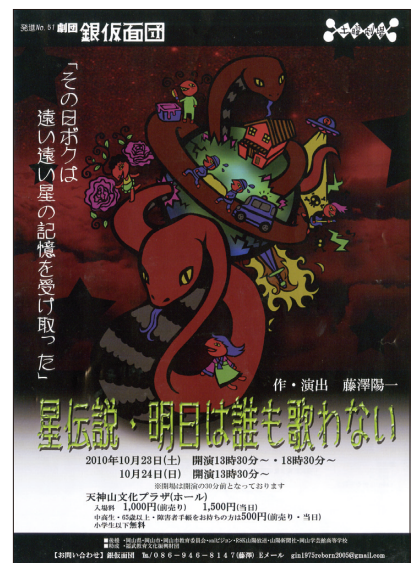
観客動員数について:観客動員数が前々回事業の2008(平成20)年天プラ土曜劇場(前回2009(平成21)年の事業は天プラ主催事業の為対象としない)に比べて残念ながら減少した。原因としては少ない構成員の為演者に回すのが精一杯で裏方は外部支援者の協力に頼っているのが現状で上演時期が国文祭付近だったことや、本来最も多く動員が見込める2日目の千秋楽(最終公演)が雨天という悪天候だった為客足が伸び悩んだこと、演者の数が少なかったこと、他劇団に比べると宣伝力が弱いことが挙げられる。一時的、単発的な成果ではなく、この星、この国、この地域に生きる者としてどのような発言、表現をするべきか、長いスパンで考え、表現していきたいと思う。観客動員数を増やすこと、劇場に足を運んでいただくことの努力は以下に挙げる。

宣伝面について:国文祭や天候といった外的要因は仕方ないにせよ、宣伝力の弱さは大きな課題で、特にWeb面は未だホームページ(以下HP)が無いなど致命的であるといえる。この岡山でも力や勢いのある劇団は、Web面においても相当な力を入れている。今後は従来通りの宣伝活動と並行してWeb面にも力を入れ、知名度を上げていきたい。

構成員の問題:前述や活動歴にもある通り長い歴史を誇るも実態は非常に若い劇団で、構成員も再結成以来減少の一途をたどっている。構成員

の減少は観客動員の減少や劇団の停滞にもつながるので、構成員の増員を回り演者だけでなく裏方の発掘育成にも努めたい。

経済的問題:演劇に参加する若者たちに現状は非常に厳しい状況である。その為に惜しい人材が次々とリタイヤしていくのがとても辛い。



公演案内チラシ